

大学院 GP バングラデシュ訪問報告書



2008年2月

はじめに

大学院教育GPプログラムとしてバングラデシュに行くことになった。

世界最貧国のひとつといわれるバングラデシュにおいて、草の根レベルで地道に生活改善に取り組んでいる組織、人は限らない。そんな状況と姿勢から学ぶことが目的であった。

参加院生の専門領域はまちまち。ハンセン病回復者支援、障害者教育、途上国の労働問題、国際紛争解決、…。共通項は、マージナルな集団に焦点を当てようとする視点ぐらいのものか。

時間の無い中、スケジュールの立案、先方とのアポイントとり、また準備勉強会、全てとは当然いかなかったが、多くを参加院生中心に進めてもらった。実際に旅行に出かけたのは10日ほどではあるが事前の準備、事後の作業をふくめれば結構な労力と時間をさいている。限定された参加人数ながら、充実したプログラムであったと思う。

バングラデシュで私たちを迎え入れ、貴重な情報を提供してくれた諸団体、人々には衷心より感謝申し上げたい。貧困者へのマイクロファイナンスでノーベル賞まで受賞したグラミンバンクには本部でのブリーフィングのあと、組織農村にも案内いただいた。チャンドラゴーナ・キリスト教病院では、独自に地域予防医療システムを構築するプログラムを見せていただいた。献身的に活動する宮川医師からも貴重なお話をうかがうことができた。チッタゴン大学社会学部のチョードリー教授には都市貧民(最下層カースト)を支援するプログラムをご紹介いただいた。国連開発計画UNDPダッカ事務所では、全世界が共通して取り組む「ミレニアム開発目標」(MDGs)への対応について、そしてカルヤニ特殊学校ではバングラデシュという日本とは随分異なる環境における障害児への支援について学んだ。

今回の研修旅行が、参加院生のそれぞれの専門領域の考察にポジティブな視点を与えることになっていればそれに越したことは無い。しかし、生活と命をかけて活動するバングラデシュの人々の姿から、そんなちっぽけな成果しか得ていないとしたら、この旅行は大失敗である。…

帰国後の参加院生の表情を見れば、そこでの経験が各自に大きな爪あとを残した「大成功の旅行」であったと言い切れることは付言するまでも無い。

最後になったが、今回の研究旅行は多くの方にお世話になりながら実現できた。特に、事務的な手続きをしていただいた高尾千秋研究員、木村純子さん、中谷彩一郎さんには記して御礼申し上げます。

教員引率者 太田 和宏

追記 なお、本報告書には「ESDプログラム」で同時期にバングラデシュを訪問した、松岡広路教授、高尾研究員にも寄稿いただいている。

Bangladesh 行程表

	訪問先
2008.2.18	Bangladesh (ダッカ) 着
2008.2.19	グラミン銀行(本部)→グラミンバンク フィールド(Bangladesh 北西部 Nimgachi 村)
2008.2.20	グラミンバンク フィールド(Bangladesh 北西部 Nimgachi 村)→ダッカ
2008.2.21	ダッカ(International Language Day)
2008.2.22	ダッカ→チッタゴン(チャンドラゴーナ・キリスト教病院)
2008.2.23	チッタゴン(チャンドラゴーナ・キリスト教病院)
2008.2.24	チッタゴン(チッタゴン大学、スーパーコロニー)→ダッカ
2008.2.25	ダッカ (プロティボンディ協会訪問)
2008.2.26	ダッカ【UNDP(国連開発計画)】訪問
2008.2.27	帰国

-参加者一覧-

大学院 GP 訪問メンバー

太田和宏（人間発達環境学研究科准教授）

石原廉人（人間発達環境学研究科博士課程前期課程人間環境学専攻1回生）

田阪綾子（人間発達環境学研究科博士課程前期課程人間環境学専攻1回生）

阿波美織（人間発達環境学研究科博士課程前期課程教育・学習専攻1回生）

小林洋司（総合人間科学研究科博士課程後期課程人間形成科学専攻2回生）

現代（ESD）GP 訪問メンバー

松岡広路（人間発達環境学研究科教授）

高尾千秋（人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター学術推進研究員）



地図

■ バングラデシュ人民共和国 (People's Republic of Bangladesh)

<http://maps.google.co.jp/maps?f=q&hl=ja&ie=UTF8&ll=23.986253,90.021973&spn=7.784355,14.0625&t=h&z=7>

● チッタゴン (Chittagong)

<http://maps.google.co.jp/maps?f=q&hl=ja&ie=UTF8&ll=22.331737,91.821928&spn=0.061609,0.083342&t=h&z=14>

● ダッカ (Dhaka)

<http://maps.google.co.jp/maps?f=q&hl=ja&ie=UTF8&ll=23.709924,90.407138&spn=0.060983,0.109863&t=h&z=14>

ウェブサイト

■ 大学院 GP プロジェクト「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」

<http://gph.h.kobe-u.ac.jp/>

■ 現代 GP プロジェクト「アクション・リサーチ型 ESD の開発と推進」

<http://gpesd.h.kobe-u.ac.jp/>

■ 神戸大学発達科学部・神戸大学大学院人間発達環境学研究科

<http://www.h.kobe-u.ac.jp/>

第 1 部 訪問した団体の報告



1. グラミン銀行 Office

田阪綾子

19日はダッカ市内にあるグラミン銀行のオフィスを訪問し、グラミン銀行の概要について話を聞いた。

グラミン銀行は、経済学者のムハマド・ユヌス氏が総裁を務め、貧困層を対象とした低金利の小規模無担保融資(マイクロクレジット)を行っている。70年代バングラデシュの東南部チッタゴン県ジョブラ村からNGOとして活動を始め、1983年政府から特殊銀行と認められた。2006年には「底辺からの経済的および社会的発展の創造に対する努力」が評価されノーベル平和賞を受賞した。

グラミン銀行の特徴の一つは借り手の97%が女性ということだ。その理由は女性の方が男性よりも家族のためにお金を使うだろうと考えられているからであり、女



グラミンバンクオフィスでのプレゼンテーション

性が事業を行うことによって収入を得ることで家庭内での発言力が増し、女性の社会的地位の向上にもつながるとも考えられている。もう一つの特徴は貧困層を対象としながら98.9%という高い返済率を維持していることだ。これは借り手が融資を受ける際に5人1組のグループを作り、互いに融資が有効に使われるかを確認するとグループレンディング制度が貢献している。グループは定期的にミーティングを行い情報交換の場にもなっているという。

午後からは実際にグラミン銀行が活動しているフィールドに移動した。移動はマイクロバスで4時間。日本に比べ交通事情が悪く、街中の渋滞は深刻なものだった。郊外では未整備の道路も多く、車の天井に頭を打つほど揺れることもあった。またハイウェイ強盗が多発しているらしく、復路では何度も警察(軍?)の検問に足止めされた。

ようやく村にたどり着いたときにはすっかり暗くなっていた。夕食の前に市場を散策したが、ムスリム社会のため夜の市場には女性の姿は全くなかった。外国人はめずらしいらしく我々の周りにはあつという間に人だかりになった。やむなく日本の歌を歌うと、それまで物珍しそうにしていた人たちに笑顔が見られた。お返しに若い男性がバングラデシュの愛の歌を歌ってくれた。愛の歌にお礼を述べて、ゲストハウスへと帰った。

2.グラミン銀行 Field

田阪綾子

20日は朝から女性たちのミーティングを見学した。ミーティングは通常週1回、朝7時から8時半に行われるのだが、この日は我々が見学するというので朝9時から始めてもらった。ミーティングはバラックで出来た小屋で行われる。この小屋も女性たちが資金(18,000 タカ/約 28,000 円)を出し合って作ったものだ。自分たちの資金で作ったものの方が大事に使い、管理等も積極的に



ミーティングに参加しているメンバー

行うといった理由から、グラミン銀行はあえて資金提供していない。メンバーは現在 45 人で、全員既婚女性。5人1組のグループを作り、各グループには1人ずつ chair man がいる。さらに9人の chair man から1人の center chief が選ばれる。選び方は民主的な選挙によるもので、この村の center chief はアレカさんというとても面倒見の良さそうなしっかりものの女性だった。

メンバーの多くはグラミン銀行からの融資で、牛を買ってその乳を売ったり、池を借りて魚を養殖したりと事業を始める人が多い。なかには借

金の担保にしていた土地を買い戻したという人もいた。メンバーになって5年目という女性は「生活のレベルが高くなった。商売をしているが、店に並べる商品の数が増えた」という。またメンバーになって7年目の女性は「週に一回集まるのが楽しみ。様々な問題を話し合うことができる」と語った。女性たちは物質的な生活レベルの向上を目的としてメンバーになることがほとんどのようだが、グラミン銀行での活動を通して情報を交換したり、組織のなかで「リーダー」の役割を果たしたりといったことを通して、結果的に女性のエンパワーメントに繋がっているとも言えるかもしれないと感じた。

ミーティング終了後、実際にグラミン銀行から融資を受けて事業をしているメンバーの家を訪問させてもらった。グラミン銀行からの融資で内職をしているという女性の家では、長女と次女が飾り箱づくりを手伝っていた。夫も農作業の合間に手伝っているという。飾り箱は100個分の材料を200 タカで仕入れ、組み立てて230 タカで売る。一日中作業をして組み立てられるのは100個程度。収入としては多くないが、現金収入の機会が少ない農村では貴重な収入源になっている。収入は娘たちの学費に充てているという。

グラミン銀行からの融資で牛を買ったという女性の家では大きな牛が小屋につながれていた。融資で牛を買うためには、「小屋を準備する」「飼い方を学ぶ」「飼料用の資金を準備する」などの条件が課されている。メンバーの女性は「この牛はバングラデシュ産の牛と外国産の牛の交配種で乳の量が多い分が、病気になりやすいなど世話に手がかかって大変」と話しながらも、「また融資を受けてもう一頭飼いたい」と意欲を見せていた。

その後センターの上部機関であるブランチオフィスを訪問した。ここでは女性へのマイクロクレジット以外の活動についても聞いた。学校にいけない子どもへの学費ローンや奨学金のほか、マイクロクレジットの対象にならないような最貧困層には 1000 タカを譲与している。またグラミン銀行の活動は農村の衛生面の向上にも貢献している。グラミン銀行のメンバーには16の約束が課



村のみなさん

せられており、その一つに「自宅にトイレを作ること」がある。従来から政府も農村の衛生向上には取り組みたいと考えていたが、村民たちのモチベーションをあげられずにいた。グラミン銀行の場合トイレを作ることが融資を受けるための条件になるため、村民たちのモチベーション向上にも繋がった。ただ16の約束は貧しい人々が短期間で達成できるものばかりではなく、あくまで努力目標。「今後はこの16の約束を少しずつでも達成していくことが課題だ」と

ブランチマネージャーは話していた。

同席したエリアマネージャーは、20年前グラミン銀行がこの地域で活動を始めた当初から関わっていた人物で、活動当初は車もなく、各村々を自転車で訪問していた。また村人たちは「利子を取るような銀行からお金を借りたらキリスト教徒になってしまう」「お金を借りたら海外に売られてしまう」という根も葉もない噂を信じており、地道な説得・説明によって活動を広めてきたという。

現在では世界中で行われているマイクロクレジットも多くのスタッフの地道な努力や情熱、そして何より成長しようという貧しい人々の意欲の積み重ねによって広まったということが今回の視察を通して分かった。今回視察のために尽力してくださったグラミン銀行のスタッフの方々、暖かく迎え入れていただいた村の方々から感謝している。

3. 【International Language Day】「ベンガル語国語化運動の日」



死者を祀るモニュメント

2月21日は、ベンガル語国語化運動記念日で休日であった。この日は、ほとんどの団体、企業、商店が休みだったのでセレモニーに出かけることにした。現在のバングラデシュは、イギリスからの独立時、パキスタン領東ベンガルとして出発した。1947年から1971年のパキスタン統治下では、ウルドゥー語を唯一の公用語としようとした西パキスタンに対し、東パキスタンではベンガル語が東ベンガルの民族的アイデンティティの中心とみなされ、最終的にパキスタンからの独立へとつながった。1950年から1952年にかけて行われたベンガル語運動では、1952年2月21日ベンガル語を公用語とすることを求める言語活動家と学生のデモとパキスタン軍が武力衝突するまでに至った。その日が独立以前のベンガル語運動の弾圧による死者の記念日「ベンガル語国語化運動の日」としてバングラデシュの公式の祝日となっている。

(参考URL: <http://ja.wikipedia.org/wiki/ベンガル語>)

#.E3.83.99.E3.83.B3.E3.82.AC.E3.83.AB.E8.AA.9E.E5.85.AC.E7.94.A8.E8.AA.9E.E9.81.8B.E5.8B.95)

4.チャンドラゴーナ訪問

小林洋司

バングラデシュの東部チッタゴン丘陵地帯のチャンドラゴーナという地域にある病院を訪れた。チャンドラゴーナキリスト教病院(CHC: Christian Hospital Chandragohna) というこの病院では、1907年設立され、地域に根ざした医療活動が企画、展開されてきた。また、CHCは、地域の住民からも信頼され、病院の周辺にはキリスト教を信仰する住民も多いようであった。バングラデシュの国民は、イスラム教やヒンズー教の人が多く、キリスト教の病院の世話になるとキリスト教に引き込まれるという「うわさ話」も歴史的にはあったようだが今日ではチャンドラゴーナで重要な役割を占める病院である。

病院を含め、その周辺の丘陵地帯は、バングラデシュ国内でもとりわけ多くの少数山岳民族が暮らしている地域で、周辺では唯一緊急手術のできる病院として、医療活動のみならず看護教育や地域医療など行っている。今回の1泊2日の訪問では、CHCの概要とそれに関わる2つの大きなプロジェクトを見学させていただいた。なお、CHCの窓口になり、私たちを受け入れてくださったのは、JOCS(Japan Overseas Christian Medical Cooperative Service)からCHCに派遣されている宮川眞一医師であった。

ひとつめのプロジェクトは、先述している少数民族たちを含めた「地域全体の健康を守る」プロジェクトである。もうひとつは、クリスチャン病院内のハンセン病センター(CLC :Christian Leprosy Center)である。この2つのプロジェクトを中心にCHC訪問の概要を日程に沿って報告する。

－2月22日－

初日の午前中は、まず、ヘルスワーカー宅の見学とフィールドワーク見学、公衆衛生プロジェクト(「地域全体の健康を守る」プロジェクト)の説明を受けた。このプロジェクトでは、モバイルクリニックというCHCの医療スタッフが少数民族の山間部へ赴き、医療サービスを行ったり、村で働いてもらうヘルスワーカーの人(BMW: Basic Medical Worker)を柱にしながら、地域で蔓延する感染症(マラリアなど)対策を実施したりしている。BMWは、地域の村出身の女性である。女性(とりわけ、母親)が選ばれているのは、転職したり引っ越ししたりする確率が低く、その地域にしっかり根をはって活動してくれるからだという説明を受けた。BMWの主な仕事は、家庭訪問・調査、病気の相談であった。

続いて、ハンセン病センター見学・装具靴作成室見学したのち、バングラデシュにおけるハンセン氏病の状況と対策講義を聞いた。ハンセン病センターは、日本とは違いハンセン病を治療にくる人も多く、病室にも様々な後遺症を持った人が入院していた。さらには、センター敷地内装具靴を作る部屋もあることに驚いた。しかしながら、バングラデシュ国内でも非常に遠いところからわざわざチャンドラゴ



装具靴作成室の光景

ナの病院にやってきている人もおり、住んでいる地域の近くの病院には行きにくい事情があったのかもしれない。

そのあと、ハンセン病センターでプロジェクトを推進するリーダーによるプレゼンテーションと、ハンセン病回復者の家族から見た差別や困難な状況についての講義があった。

この話を聞いて、バングラデシュでもハンセン病問題に対する偏見をどのような方法で解消していくかが、重要な課題であるということが確認できた。この日は、その後ウェルカムパーティーを、深夜には宮川先生のお宅でとても和やかな雰囲気でお話をさせていただき、楽しく有意義な時間を過ごすことができた。

—2月23日—

2日目は、CHC 病院見学の後チョードリー院長による CHC 及び CLC の概要についての説明があり、午後からは、病院敷地内ハンセン患者村(アシラム)と、病院外のハンセン病回復者たちが多く住む村を訪問した。チョードリー院長には、忙しい中時間を取っていただき、CHC で取り組まれているプロジェクトがとても先進的なプロジェクトであることなどをお話していただいた。午後からは、療養所内外でハンセン病回



チョードリー院長の講義

復者が住む／住んでいたコミュニティーを訪問した。

療養所内で住む人たちは、想像はしていたがどことなく寂しそうな印象を受けた。一方、ハンセン病回復者の住む村は、非常に賑やかで、寂しそうな印象を受けなかった。この差は、やはり、住む場所の違いが関係しているのではないかと思った。つまり、園内で居住する人は、周囲にハンセン病回復者と、病院関係者しか住んでいないということ、言い換えれば、歴史的に多くの人々とコミュニケーションがとりづらい環境にあ

ったということも影響しているのかもしれない。

CHC を訪れて、地域と医療と知識の関係をどのように考えていくかということを改めて考えた。BMW は、村、あるいは地域という枠組みの中で健康・医療の充実のためにどのような支援ができるのかという地域医療プロジェクトの一つの方法であるし、CLC の取り組みもハンセン病を正しく理解するためにはどのようなアプローチが求められるのか、効果的かという「理解の支援」の問題であった。病院が単なる医療機関ではなく、地域をかえていく拠点として機能する可能性を見たような気がする。

5. チッタゴン大学、スウィーパーコロニーを訪問して

石原廉人

2月24日、社会学がご専門でチッタゴン大学で教鞭をとられているチョードリー先生を訪問した。チョードリー先生を訪問した当初の目的は、先生がスウィーパーコロニーの諸事情に明るく、ストリートチルドレンへの支援活動もされているということで、先生の活動領域と我々の問題関心が合致したからである。先生は、米国のファンドで設立された「Image」という町の診療所を三カ所運営されていた。先生はご親切にすべての診療所を案内して下さった。昼過ぎからは、当初の目的の一つであったスウィーパーコロニーを訪問することになった。スウィーパーコロニーとは、インドやバングラディッシュなどに見られる都市清掃者の集落である。都市清掃に従事する人々は主にアウトカーストに位置づけられる人々で、いわば特権的に都市清掃の仕事を担当してきた歴史がある。ところが、近年、



スウィーパーコロニーの光景

地方から出稼ぎに来たイスラム教徒人々やキリスト教徒の人々も清掃の仕事に就くようになり、地域によっては宗教的対立が生じている例もあると聞いていた。我々が訪れることになったコロニーは「Bandel」とよばれるコロニーで、チッタゴンのほぼ中心に位置していた。「Bandel」に到着してすぐに感じたのは独特の閉塞感であった。外部との接触を拒否するような閉ざされた空間がそこにはあった。集落の入

り口は、低い煉瓦作りの壁でできており、コロニー住民が怪訝そうに我々のことを覗いていた。コロニー内には、公営のアパートがあり、ベランダには様々な色のサリーやルンギが干されており、見事な色彩美をつくりだしていた。しかし、その周辺にはバラック小屋がアパートを取り囲むように密集しており、そのアパートで暮らすことのできない人々も多いようだった。我々は、米国のNGOによって建設された学校の校舎へと通された。そこで、コロニーの青少年たちの若いリーダーが、我々に対応して下さった。「民営化によって、清掃者の雇用が減少するかもしれないので不安である。」「他教徒が清掃労働に参入してくるのは、マイナスではなく我々にとってむしろプラスである。我々の仕事の辛さを他の人にもわかってもらえるからだ。」「清掃労働以外の仕事にも、もちろん就きたいが、差別があるため難しい。」など彼なりの意見を聞くことができた。ただし、彼以外の住民たちはほとんど発言をせず、女性とは顔をあわせることさえ難しかった。このため、今回の訪問は反省点が多かったように思う。



スーパージョーニアのみなさんと

6. プロチボンディ協会

阿波美織

今回のバングラデシュ訪問にあたっては、参加する学生メンバーの研究関心がそれぞれ異なるという点があった。それを利点に変え、訪問先は学生の関心のある施設、団体、場所にすることに決め、学生が主となって、訪問先を調査し訪問先とのコーディネートを行って各々行うこととなった。そこで、訪問事前準備の打ち合わせの際に、私はバングラデシュの障害者福祉の現状について知りたいということをメンバーに伝えていたため、バングラデシュの特別支援学校の訪問のコーディネート担当をすることとなった。首都ダッカにある障害者特別支援学校を調査したところ、バングラデシュ・プロチボンディ協会（以下 BPF）の「障害者の為のカルヤニ特殊学校」という学校があることがわかった。調べると BPF は、1984 年 5 月に設立されており、設立当初から知的障害児と脳性まひ児を対象としたサービスを行ってきている。さらに、障害という問題だけではなく、貧困という問題も重複している子どもたちへのサービスを、特殊学校や作業所、地域密着型リハビリテーションプログラムなどを年間を通して行っているということがわかった。地域密着型であり、知的な障害、身体的障害、社会的障害がなどの様々な障害が重複している子どもたちへのサービスを行っているという点が訪問先に選んだ理由である。

訪問日程は他の訪問先との兼ね合いもあり、25 日の午前中だけの訪問ということで事前にカルヤニ特殊学校校長先生に連絡を入れていた。25 日の朝、ホテルからタクシーで特殊学校に向かったのだがタクシーは多くの人が賑わう街に着いた。こんな街中にあるのか！というのが最初の印象である。日本では、古く建てられた特別支援学校は、少し人里離れたところがあり、施設と同様に社会から排除された場所に建てられていたりする。BPF は設立と同時にカルヤニ特殊学校を設立して



プロチボンディ協会で販売されている布製品

るので、1984 年の設立である。その当時もこの街周辺は賑わっていたのだろうかという疑問がうまれた。そして、特殊学校に着くとすぐに校長室に招かれ、BPF の概要の説明を受け、実際に校内見学をさせてもらった。カルヤニ特殊学校では入学を希望する障害児に、知的審査と医療診断を受けてもらい、年齢に従ってそれぞれのクラスに配属し、訓練と教育を受けるということである。そのクラスの名前はバングラデシュの花にちなんでそれぞれ決められており、4 歳から 18 歳までの生徒が特殊学校に通学している。それぞれのクラスを見学させてもらって気づいたことは、視覚訓練、視覚療法といわれる絵の描かれたカードやポスター、張り紙などを多く授業に取

り入れているということである。低学年の授業では、コミュニケーションを取る工夫を試みようとして、絵の描かれたカードで授業を行うことを主流として取り組んでいる。高学年になると視覚訓練や視覚療法よりも、教科書を用いた授業が行われているようであった。特殊学校の最上階にあがると、そこでは卒業された元生徒たちが数名いて、布に様々な模様のハンコを押して作業をしていた。そこで作られたものを、この特殊学校では売り物として販売している。卒業した生徒以外にも在校生、上級生が機織機を使って、服やカバン、小物などを授業の一部の時間を利用して作成しているようだった。



織り機

教員の数は1クラス3名が基本で、教員になるには様々な講習会などを受けた後、厳しい審査があるとのことだった。教師は全員女性であった。なぜ特殊学校の教員になったのかという質問をすると、障害のある子どもたちの支援がしなかったからだという声がほとんどであった。校内見学で感じられたのが日本の特別支援学校とあまりかわらないということであった。

た。自己決定を重要視し、自発性をうむ教育を行うという方針がとられており、教室や学校全体の設備等も目立った違いはなかった。

しかし、見学中不思議に感じた点が2点あった。まず1点目は学校の前で座っている多くの女性である。彼女たちは、このカルヤニ特殊学校に通学している生徒の母親であるということだった。そして2点目は制服をほとんどの生徒が着ているということであり、身なりも整えられていた。この2点から考えられることは、特殊学校に通学できている生徒は裕福な家庭の子どもたちであるということである。母親がずっと学校の前に1日待たせられるのも、家庭が裕福で仕事をする必要がないということを意味しているのではないか。

今回の BPF 障害者の為のカルヤニ特殊学校の見学では、バングラデシュの経済問題が社会的排除とともに感じられた。街中にあるこの特殊学校に通学することができず、行き来する車に物売りする障害児がいたり、かたや皆と同じ制服を着て社会に適応できるようにと考えられた授業を受けている障害児がいたり。日本でも同じように、社会的に排除を受けている人たちの中でも、階級のようなものが知らず知らずつくり、本当に問題とすべき排除の部分が見えていない現状にあるのかもしれないと感じた。今回の特殊学校の訪問では、自分の研究関心について新たな視点がうまれた貴重な時間となったと感じられた。今回の訪問を受け、再度、障害者福祉の現状についての問題を調査しようと強く感じた。

7. 国連人間開発計画（UNDP）

田阪綾子

26日午前には国連人間開発計画（UNDP）のオフィスを訪問した。UNDPでは主にバングラデシュの開発と環境問題について話を聞いた。バングラデシュは近年たびたびサイクロンに襲われており、また今後温暖化によるヒマラヤの雪解け水で大規模な洪水が起こる可能性もあり、環境問題対策はバングラデシュの成長に必要不可欠である。特に南部の湾岸地域は貧困層が多く居住しているので、災害が発生した際被害の大きい地域でもある。そのため湾岸地域の貧困削減・災害対策は力を入れているプロジェクトの一つである。また北部では大気汚染が深刻で、ぜん息対策プロジェクトも行っている。

現在取り組んでいる環境対策の一つがエネルギー転換だ。ダッカ市内では天然ガス車の普及に取り組んでいる。実際、我々も街中でたくさんの天然ガススタンドを見かけた。またスーパーのレジ袋がビニールではなく布ということにも大変驚いた。地方での取り組みとしては、家庭用燃料に竹や牛糞を乾燥させたものを使うことなどを薦めており、台所の改良にも取り組んでいる。また人口抑制もエネルギー問題と密接に関わっており、バングラデシュでは80年代から人口抑制政策に取り組んでいる。当初は子ども2人、現在はこども



UNDPのオフィスにて。前列左がイスラムさん。後列右端が、カーンさん。中央がハクさん。

も1人を推奨している。

現状として、実際のプロジェクトを行なう場合に県単位まではコーディネートできるが、それ以下の行政区分ではコーディネートが困難だということをおっしゃっていた。課題は、県以下の行政区分のコーディネート強化と行政能力の向上。民間の力の活用も課題だという。

発展途上国での自然災害が相次いでいる。そのような自然災害が起こらないことを願っているが、ミャンマーや四川のニュースを見ていると万が一の備えが重要であることを思い知らされる。UNDPのプロジェクトが有効な備えになることを期待している。

多忙なスケジュールのなか我々の訪問に対応してくださり、また様々な資料を提供してくださったイスラムさん、カーンさん、ハクさんには大変感謝している。

第 2 部 参加者の感想



バングラデシュ訪問を終えての感想

阿波美織

このたびのバングラデシュ訪問では、修士課程3名、博士課程1名という学生が中心となり、訪問先を自らの研究関心に引き付け、事前の準備段階のミーティングにおいて相談し、決定し、訪問先とのコーディネートをを行ったという貴重な経験をする事ができた。事前準備では、十分にバングラデシュのことを調べることは困難であったが、何度か重ねたミーティングにおいて、それぞれが調査してきた内容についての議論を行ったり、事前学習を行ったりした。研究領域の違う4人であったため、事前の議論、訪問後の議論においておもしろい議論を行う事ができたと嬉しく思っている。他領域との意見のクロスオーバーが可能であると強く感じ取れた訪問となった。今回は、様々な領域施設の訪問を行った。どの訪問先でも感じたことは、すべてのことは繋がっていると言うことである。日本でも、専門性を高める教育、専門家育成の強化など、専門領域で活躍できる人の育成、教育が進められている。そのことによって狭い領域からの視点で人と接することが多くなっていると感じられる。そうではなく、あえて違う領域の学生と今回訪問できたことで、自分たちの視野の狭さや、他領域との連携が更なる新しい知識を得ることができ、クロスオーバーの重要性を感じた。非常に刺激的な毎日であった。

バングラデシュ訪問で感じたことは、本当の豊かさとは何なのかという事である。お金でかなう豊かさばかりではないということを痛感した。その中でも、日本との違いを多く感じたのは、人々の笑顔が輝き、生きると言うことに貪欲であるという気持ちであったと思う。日本では当たり前になり水が蛇口から出てきて、当たり前になり食事が取れて、当たり前になり生活ができる。生きると言うことに欲を持つことも欠けてきているように感じられる。そして、私たちは枠にはめられた毎日を生活しているのかもしれないと感じた。しかし、日本もかつてはバングラデシュのようであったと考えられる。それを考えると、このグローバル化した世界で、バングラデシュも経済発展が行われ、様々な町が都市化へと進んでいくことが予想される。そこで変化していくものは、日本と同じものなのだろうかという疑問を持った。経済発展が進む中で変化を期待するもの、また、変化を期待しないものなど、このバングラデシュは今後変わっていくだろう。だからこそ今回バングラデシュを訪問して私たちが日本の人たちに伝えていかなければならないこと、バングラデシュに返していかなければならないことなど、バングラデシュの現状を垣間見てきた私たちだからこそ行わなければならないと感じた。それを行うにあたって、本当の豊かさとはなんなのかという訪問で感じた疑問としっかり向き合わなければならないのだろうと考えている。当たり前の生活、当たり前のことに疑問をもつということこそ、生きると言うことに貪欲になるということなのかもしれないと思った。

今回の経験をいかして、今後研究活動に取り組んでいきたいと思う。

ダッカに着いて

石原廉人

ダッカに着いて、まず僕を驚かせたのは公衆便所でした。男子の小便洋便器の高さが尋常でないのです。僕の足は短い方ではないのですが、背伸びをしてやらないとうまく便器に小便が入りませんでした。バングラデシュの人たちだって、そう足が長いわけではありません。では、なぜこのような高さなのか。そう。なぜならバングラデシュは元タイギリスの植民地であり、その名残だったのです。ダッカを離れるとき、僕はそんなイギリス式の便器の前に立ち、ダッカに着いた時の衝撃を懐かしみながら用を足していました。と同時に、僕は松岡先生の問いに対する回答をぼんやり考えていました。松岡先生の問いとは次のようなものでした。「この旅で様々な場所を訪問したが、一貫したテーマとはどういうものだったのか。簡潔に述べよ。」僕は、ダッカを離れる今に至っても尚、この問いに対する明確な回答を用意できずにいました。悩んだあげく、小便が便器に入らず床にこぼれてしまいました。その瞬間、僕の頭によぎったのは「差別」の二文字でした。バングラデシュの人たちは優しい。親切で礼儀正しい。しかし、その裏で「差別」が見え隠れしているのは確かでした。ハンセン病患者の病棟を訪れたときには気がつきませんでした。しかし、一般の病棟で僕が見たのは、布団に潜ったまま顔を見せようとしない、一人のハンセン病患者の姿でした。所長はハンセン病患者の病棟について「ハンセン病患者は特別なサービスを必要としているため病棟を離してある」とおっしゃっていました。一方で、一般の病棟にもハンセン病患者がいるのはどうしてか尋ねたときは「特別なサービスを必要としているからこっちに來ているのだ」とおっしゃっていました。どうにも話が噛み合わない。「これは、特別サービスという名の隔離であり差別だ。」同行した小林先輩がこう漏らしたため、僕はハッとしました。ハンセン病患者への差別はチェ・ゲバラが60年前バイクで訪れたハンセン病の村と同じくここでも生きていました。このことはハンセン病について無知であった僕には衝撃的でした。「差別」。このことについて、もう一度衝撃を受けたのはスウィーパーコロニーでのことでした。一通りインタビューも終わったし、さあ、みんなで記念写真でもとりましょうか、という時に彼らは日本人である我々の前に決して出ようとしないのです。「差別」「差別」と書いてきましたが、バングラディシュは日本なんかよりよっぽど良い国です。日本にも数え切れないくらいの差別があるのは事実です。いずれにせよ、そこに暮らしていると、そのことに鈍感になりがちだといいたいのです。差別の苦しみは当事者でないと分からないと思います。しかし、外部者はその形をとらえることができるのではないのでしょうか。以上が、僕の感想です。

大学院 GP としてバングラデシュを訪問して

小林 洋司

今回は、大学院 GP プロジェクトの一環としてバングラデシュを訪問した。大学院 GP の趣旨はいうまでもなく、大学院生が、正課ではない活動に『参加』することを通して、正課で得られるスキルや知識を深め、また正課だけでは得られない経験をするなかで、正課である自らの研究に幅をつくることを目指すプロジェクトである。

こうしたミッションのもとで大学院 GP として、バングラデシュを訪問したのは太田先生と 4 名の大学院生であった。この 4 名の院生の研究領域は大きく分けて教育・学習のプロセスや意義を研究しようとする領域と、途上国の問題を社会学的観点から研究しようとする領域に分類できる。2007 年末からの準備段階を含めて、このプログラムを終了するまでの間で、私が感じたことを整理すると以下の 4 点になる。

1 ネゴシエーションとマネジメントのちから

準備段階において、院生が自分の関心のあるフィールドについて資料を収集し、自らバングラデシュと連絡を取り、日程調整、訪問時の見学内容について交渉した。それらのやりとりのなかで、交渉力(具体的に言えば、英語の依頼文の書き方など)を求められる場面があった。四苦八苦しながらではあったが非常に学ぶことの多い機会であった。また、企画者として他の院生が収集してくる資料を見合わせながら、限られた日程、時間のなかでそれらをどのように配置し、調整するか、つまり訪問をマネジメントする能力を問われる場面も多くあった。これらの契機によって、交渉と調整を実際に体験し、自らの稚拙さき気づくことができたと思う。

2 研究の領域のクロスオーバー

報告されているように、障害者、ハンセン病患者および回復者、貧困に喘ぐ人々、バングラデシュにおける被差別者などを支援の対象とするプロチボンディ協会、スーパードコニー、UNDP、CHC、訪問したそれぞれの団体にみられるように、院生の関心は、様々である。このような機会に「フィールドを行き来する」ことは、自分が関心を持っていなかった社会問題に対して関心を持つようになったり、自分の研究対象と他の社会問題が深くかかわり合っていることに気づくようになったりと、あらたな発見に富んでいた。

3 研究の観点のクロスオーバー

それぞれのフィールドに入っていくとき、院生によって場でおこっている出来事を分析する観点が違うということも新鮮な驚きであった。これまで歴史的に議論されてきた個人と社会の関係、主体と客体の関係や、人権・開発・環境の関係などが複層的に絡み合った社会問題を考えるうえで問題の所在、解決方法のアプローチは様々である。このアプローチの違いを強く認識することができ、自分の観点の狭さ、他の観点のおもしろさを発見することができた。

4 人間関係のクロスオーバー

最後に、人間関係の構築の場であったということがいえる。クロスオーバーは、異なる分野の物事を組み合わせることで新しい物事を作り出すことを意味するが、この「物事」を人間関係と読み替えれば異なる分野の人間関係を組み合わせることで新しい人間関係を創り出すということになるだろうか。まさしく今回のプログラムそのものが人間関係構築の場であった。ツアーのあとも大学での院生同士の自主ゼミで交流したり、知人を含めて会話を楽しんだりバングラで時間をともに過ごしたあとで時間を共有することが増えた。いうまでも

なく先述した3点の基本も人間関係構築に集約できる。

バングラデシュを訪問して、研究が重なる人、異なる人が関わりを深めることの意味を再確認できたとともに、バングラデシュという国のもつ問題の大きさと、その問題がわれわれに提起する日本における問題と世界規模の問題について考える契機になったと思う。

生まれて始めてホタルを見た——

田阪綾子

停電で真っ暗ななか懐中電灯の明かりを頼りに市場からゲストハウスへと帰る。いや、停電していなかったとしても街灯のない道はどのみち真っ暗だっただろう。

「ホタルがいる。」

指差すほうを見ると、小さな光が二つゆらゆらと揺れている。恥ずかしながら蛍を見るのは生まれて初めて。まさか日本から遠く離れた異国の地で「初ホタル」を経験するとは夢にも思っていなかった。初めて見るホタルの光は、思った以上に弱々しかった。

日本で日常的にホタルが見られる地域は多くない。日本はホタルや様々なものを代償に、経済成長を遂げた。途上国の人々が羨み、ときに目標にもされる経済大国日本。しかしその「豊かな」日本では年間3万人以上の人々が自ら命を絶っている。日本だけではない。自殺率の国際比較で上位を占めるのはほとんど先進国だ。幸せな人は自殺なんかしない。経済成長の過程で代償にしてきた様々なもののために今、多くの人の幸せや命が奪われているのだろうか。

チャンドラゴーナの病院で、自殺者の救命現場に遭遇した。何が原因なのか、詳しいことは分からない。ただこの国の人たちが願う経済成長が、この日のような光景を増やすのかもしれないと思うと複雑な心境だ。バングラに経済成長が必要ないなど言うつもりはない。最貧困国といわれるバングラでは、多くの人が路上で生活し、多くの子どもが学校にも行かずに働いている。経済成長が彼らの生活を少しでも改善してくれることを願っている。ただいつも途上国を訪れて思うのは、「なにが幸せか分からない」ということ。途上国の人たちが持つ「幸せ」がどうか失われないように、とってしまう。その「幸せ」はホタルの光のようにはかないものかもしれない——。

しかし、そんな心配自体がお節介であり、先進国の価値観なのかもしれない。グラミン銀行のスタディーツアーで訪問した村では、女性たちが自分たちの生活を向上させるためにたくましく活動していた。「女性の社会的地位の向上」といった先進国の価値観を尻目に、「牛を飼う」「魚を養殖する」といった非常に現実的な彼女たちなりの「幸せ」を手に入れていっているようだった。途上国が先進国と同じような道をたどるとは限らない。私の心配も杞憂に終わる。彼女たちのたくましさを見てるとそんな気もする。

来年から社会人になる身としては、当分の間バングラを訪れる機会を得られそうにない。何年、何十年かしてもう一度バングラを訪れたとき、農村にホタルは飛んでいるのか。女性たちは何頭の牛を飼っているのか。どんな「幸せ」を享受しているのか。楽しみ半分、不安半分といったところだろうか。

市場化、脱政治化、そしてコミュニタリアニズム

太田和宏

今回の訪問における私の中での目的は、バングラデシュ草の根活動のもつ「意味」について考えてみることであった。NGOのメッカであるバングラデシュの中でも、国際的知名度をほこるグラミンバンクの小規模融資の実際からは多くを考えさせられた。

第一に、「市場化」(marketization)。市場原理主義的、新自由主義的グローバル化を批判する草の根、NGOが多い中で、グラミンバンクは、市場と仲良くプログラムを遂行しているばかりではなく、自ら「グラミン携帯電話」などの会社経営に乗り出し、今やバングラデシュを代表するコングロマリット(事業多角化を行い、事業間に直接的な関係のない事業を複数抱えた複合企業のこと)にまでなってしまった。雇用機会を提供することも社会貢献の一つと銘打ってはいるが、歴とした大企業。いまや市場の「主役」である。市場の主役に躍り出たグラミンバンクが「貧困者のために」という理念をどこまで維持し遂行できるのか。危うさを感じさせながらも、新しいNGOの存在形態に少しばかり期待を寄せる。

第二に、「脱政治化」(de-politicization)。市場化すること、市場の主役に躍り出ることと密接に関連するが、徹底した経済主義は、政治体制や政権の性格に頓着しない。お金を融資してくれる政権、マイクロファイナンスに親和的な制度を提供してくれる政治家、であればその政治的立場やイデオロギーは二次的な問題。管見によれば権利や entitlement は専ら政治体制、政権・政策と密接に関連性を持つはずだが、グラミンバンクの徹底した経済主義は、所得の向上を通じた個人の尊厳 dignity の回復、主体性 autonomy の確立を目指す。私は自分の調査フィールド(フィリピン)で政治化したNGOや活動を多々見てきているので違和感を覚えながらも、全く違うベクトルがどこに社会を導くのか興味は尽きない。

第三に、それでいて、市場にうもれてしまう個人主義 individualism を目指しているのかといえば、そうではない。逆に実践において追及されるのはコミュニタリアニズム communitarianism。マイクロファイナンスの共同連帯制度に象徴されるように、共同運営、共同学習、共同責任とコミュニティの力を十全に活用しようとする。市場に溶解しない共同体をどこまで維持できるのか、あるいは共同体に依拠して、これまでと異なる方向をどのように打ち出せるのか。先が霞んで視界不良であるだけに今後の展開が楽しみだ。

初期には誰もが予期しなかった成果にたって、グラミンバンクのこれからの新しい可能性がどのように切り拓かれるのか。グラミンバンクの実践まち、などと無責任に構えているつもりはない。私もこうした課題を、研究上の、また実践上の課題として取り組んでみたい、という思いを新たにした滞在であった。

バングラデシュ訪問

高尾 千秋

1. バングラデシュの第一印象

ダッカの第一印象は、ほんとうに凄まじい交通事情であった。リキシャ(自転車タクシー)やCNG(小型3輪自動車)や車が道路にあふれている。そんな道路を人が勝手に横断する。車は、クラクションを鳴らし我先へ進むため、どこでも絶えることのないクラクションの音。割り込運転が当たり前。ちょっとした逆走など当然である。といった凄まじい程の交通事情と交通マナー。世界的にガソリンが高騰している中で、最貧国と呼ばれるバングラデシュの車の多さを聞くと、燃料は天然ガスを使っているとのことであった。車の運転になれている私でさえ、耳を塞ぎ、目を閉じたくなる交通事情であったが、そんな交通マナーに反し、現地で出会ったバングラデシュの人たちが予想外に明るい、優しい人たちであった。その意味では私にとっては不思議の国でもある。

2. グループワーカーとしてのユヌス教授

グラミン銀行のスタディコースで Nimgachi 村ⁱにあるセンターⁱⁱを訪問した。ユヌス教授が、「経済学は目の前の飢えた人々には全く無力」と感じ始めたマイクロ・クレジットのキーワードは「貧しい」「女性」「無担保」ですが、センターでの活動の様子を見ると小集団の運営のノウハウが詰まっていた。50人ぐらいの女性がセンター長と呼ばれるリーダーの司会でミーティングを行っていた。4、5人で1グループを作り、6～8のグループで一つのセンターが構成されている。基本がこのグループ単位として活動(融資を受け返済する仕組み)し、センターを基本拠点としている。16の原則(16 decisions)と呼ばれる

ルールを唱え、これに従った行動をとることが科せられる。メンバーはセンターを通して金を借り、生活改善や自立の為に様々な収入向上活動を行う。グラミン銀行の行員はメンバーの活動を援助するワーカーの働きをしている。このような活動を見ると、グループ・ワークそのもの

Number of Members	6,908,704
Percent of women members	1
Number of centres	121,755
Number of villages covered	74,462
Number of branches	2,319
Number of areas	238
Number of zones	36
Cumulative amount disbursed since inception	306,368.63 (Million Taka)
Amount disbursed during 2006	49,871.23 (Million Taka)
Amount of loans outstanding	33,235.46 (Million Taka)
Balance of deposits	
Members	27,298.19 (Million Taka)
Non-Members	16,976.28 (Million Taka)

Highlights of 2006 (<http://www.grameen-info.org> より)

であるが、ユヌス教授がボーイ・スカウトのメンバーであったことが大きく影響したことが伺える。彼女たちが、16の原則を唱えた後の右手を挙げてサインは、ボーイ・スカウトの3つのちかいを表わす「3本指のサイン」そのものであった。マイクロ・クレジットの仕組みは専門書に譲るとして、ユヌス教授がソーシャル・ワークを学んだとは思われないが、体験的な学習手法や小集団の運営方法をボーイ・スカウト活動から学び取ったのは間違いのないであろう。

3. 現場でしか感じられないもの

バングラデシュ訪問を通して感じたものは、日本には「貧困問題」が存在するのだろうかという疑問である。今日本では、「勝ち組」や「負け組」といった表現や非正規雇用やワーキングプアなど格差や格差社会に対する危機感があるように思う。何を持って「貧困」とするか学術的な考察は別として、短期間のバングラデシュ訪問ではあるが、現地で感じた「貧困」のイメージと日本のそれとは大きく異なるものであるのは確かである。

言葉で聞く「貧困」、写真や映像などメディアを通じた「貧困」に対し、バングラデシュの街角で、ごく一部であるが村での生活ぶりを見ることで、伝わってくる「貧困」は、漠然としたものではあるが、ひしひしと感じられるものであった。その意味では、現場体験を取り入れた学習手法を積極的に活用することや、複数のメンバーで体験することから「体験の共有や分かち合い」を通じた学びの重要性を再認識した。

ⁱ ダッカの北西約 120 ㎞の Brahmaputra 川の西方に位置する Bogra 地方の農村地帯の村。

ⁱⁱ 活動の拠点として 74,462 の村に 121,755 のセンターが置かれている。センター束ねるブランチ 2,319 箇所、ブランチを束ねるエリア 238 箇所が、そしてエリアを束ねるゾーンが 36 箇所にバングラデシュ全土を区分している。

【バングラ院生ツアーに同伴して】

松岡広路

私は別件でバングラデシュに渡航することになっていたのですが、彼の地にいささか詳しいこともあって、大学院 GP の本企画の計画・実施に随伴することになりました。ここに、雑感を二つ三つまとめておきます。

まず、異質な空間の有する力、とりわけその人と人をつなぐ力を、改めて思い知らされました。参加院生たちは専門も関心も異なっていましたので、各々の思いに応じて訪問先を決定したようです。あるものは UNDP のミレニアム開発計画スタッフへのインタビューを、あるものはハンセン病療養所の訪問を、また別の院生は知的障害者施設見学を、という具合です。タイムスケジュールのなかに何とかそれらを組み込んだものの、統一感がなく、平等民主主義でプログラムが組まれたとっていいでしょう。実際、初日のグラミン銀行フィールド訪問のときには、まだ、それぞれが何を感じ、何を考えているのかもわからないままでしたから、コミュニケーションもややぎこちなく、自分とフィールドとの関係をしっかりと考えるまでには行き着いていなかったのではないかと思います。

ところが、バングラデシュという異質な空間には、それぞれの思いや頑なな専門性などをつき崩してしまう力があるようです。異邦人の五感を鋭くさせる力があるといったらいいでしょうか。常に「この場、この情景を、おまえは、どう見るのだ！」と迫ってきます。否応なく自分の認識装置が問われ、他者のそれとの比較が求められます。一日の刺激的な活動を終えてゆったりとふりかえり、他者と自己の感性システムを調和させることに、参加者は、喜びさえ感じたのではないのでしょうか。バングラは、専門や関心の異なる人たちと対話し、認識が徐々に交差するようになることの重要性を、われわれに体感させてくれたように思います。

次に、越境的な活動が問題意識の醸成に有益であることを、院生たち自身が感じたのではないかと、という点を記しておきます。うまくいえませんが、毎日の夜のふりかえり会のなかで私がふと感じたことは、彼らが語る「気づいたこと＝問題」が、日がたつにつれ多くなり、より構造的に問題を語りだしたということです。この企画のねらいは、自分の問題関心を深めるというよりも、自分の専門領域を越境し他の問題群に足を踏み入れてみるというものでした。声にだす問題が多くなり構造的に把握するようになるということは、逆に、彼らの専門性に基づく問題を、その構造との関係でより鮮明に位置づける意識行為が活発化するとも見て取れます。自分のこだわり、自分が問題にしようとしていることが、他と比べてどのような意味をもつのかを、参加者である院生たちはじっくりと考えられるようになったのではないのでしょうか。他領域との接触は、専門性の拡散につながるのではなく、専門性を再定置することにつながる、という可能性を再認させられました。

最後に、この企画に随伴させてもらって、教員の役割を再考させられたことを告白しておきます。私は確かに教員ですが、それは生涯学習や福祉教育・ボランティア学習という専門領域においてであって、他の専門が複数邂逅するようなこうした企画では、院生以上に素人であることを自覚しなくてはなりません。各院生の意見やちょっとしたコメントに、私は「なるほど」と感心させられることが多くありました。ゼミのメンバーを引き連れてフィールドに出るのはまったく違う経験をするこ

が出来たように思います。このような連携的・共同的な企画の際、教員はどのような位置にたち、どのような役割を果たすべきか、改めて考えたいと思いました。

以上、2 週間弱のスタディツアーのなかで感じたことのほんの一部を記しました。異領域の人間が集って、不安定な時間を過ごす面白さを、味あわせてもらった、というのが率直な感想です。

なお、ひとつだけ付言すると、今回のスタディツアーを基点に、何か新しい動き(社会的な実践活動)が生まれそうです。乞うご期待を。